

SRIの力

國部 克彦（こくぶ かつひこ）
神戸大学大学院経営学研究科 教授

SRIとはSocially Responsible Investmentの略で、日本語で社会責任投資と呼ばれ、投資行動において、投資対象企業の社会性にも考慮する投資活動をさす。具体的には、投資銘柄の社会性を一つの判断基準にする証券投資、株主として経営者に対してプレッシャーをかけて企業に社会的行動を促す株主行動、地域社会の零細ビジネスや貧困層への資金需要に対応するコミュニティ投資の3つがあるが、日本では証券投資によるSRIが中心である。

SRIの起源は、1920年代にアメリカにおいてキリスト教系の財団が酒やタバコに関わる企業を投資先から除外したことが起源とされるが、経済界において一定の地位を確保するようになったのは欧米においても1990年代半ば以降のことで、今世紀に入ってからその地位は急速に向上した。SRIは欧米においてさえ、もともとは投資の世界では異端児であったが、近年はSRIのメインストリーム化が叫ばれるほどになっている。

SRIの規模については、SRIをどのように定義するかによって異なるが、アメリカでは総運用資金額の10%程度、日本では個人金融資産の0.1%程度と言われており、日本での影響力の小ささがしばしば指摘されている。しかし、SRIに対する社会的関心を考えれば、SRIは資金運用額以上の力を持っていることは明らかであろう。

しばしば誤解されることであるが、SRIは社会的なパフォーマンスの上位企業から順番に投資することではない。社会的なパフォー

マンズの悪い企業を除外して、優良な企業群の中からポートフォリオを組む方法である。したがって、SRIのポートフォリオから外れるということは、優良な企業群から外れるということであり、SRIによる評価は実際の資金量以上の社会的影響力を持つことになる。

また、SRIが発展するためには、様々な社会的な選別基準（スクリーン）が並存することも重要である。たとえば、私がヨーロッパにおけるSRIの中心地であるチューリッヒの金融機関を調査したときに、あるSRIファンドは自動車業界の環境パフォーマンスを分析してV社が一番だったと評価していたが、別のSRIファンドに行くと自動車産業自体が環境に悪いので投資対象外ということであった。

このようなSRIの投資スクリーンの多様性は、SRIの社会的影響力を損なうという考え方もあるが、私はそうは考えない。むしろ、多様な価値観を反映しなければならない社会責任活動において、SRIの判断基準が一元化されてしまうことの方が問題が多いと考える。社会における多様な価値観を様々なファンドが反映する方が、総体としてのSRIの意義を高めるはずである。

しかしながら、日本のSRIはエコファンドを始め、個性に乏しい。これは投資家の意識を反映しているのでファンドだけを責めることはできないが、今後は、独自の評価基準を洗練させて、企業のCSR活動をリードすると同時に、社会的なバッファの厚みを作り出してほしいものである。